

雷山川旧河口域における 埋蔵文化財調査の手引き

—潤地区周辺の埋蔵文化財調査成果から—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

筆者がこれまで関わってきた糸島市内の埋蔵文化財調査のなかで、印象の深い遺跡のひとつに潤地頭給遺跡がある。

平成15年1月～16年3月まで1年3ヶ月をかけて総面積12,000㎡にわたる発掘調査が行われ、古墳時代初頭の国内屈指の大規模な玉づくり工房が発見された

筆者はかつて伊都国の地域構造を考える上で当該地域を伊都国における海陸交通の要衝としてその重要性を提起した（註1）が、当時は周辺一帯の考古学的な調査事例も少なく、憶測も交えた論旨となった。

その後、潤地区や志登地区一帯では開発等に伴う埋蔵文化財の発掘調査数も増加し、徐々に地域の様相が把握できるようになり、なかでも、大きな成果となったのが潤地頭給遺跡であるが、この他にも当該地区の歴史的重要性を示す遺構や遺物が確認されている。

そこで、本稿では既報告成果を概観するとともに、当該地区における歴史的な特性と今後の調査展望についてまとめた。

2. 文献史料にみる「潤」

さて、「潤」の地名は、いにしえには「閏」とも書いた。地名としては稀な呼称であるが、その由来について説得性ある記録・伝承は知られていない。戦国期には「潤」の姓を名乗る有力氏族の台頭が記録に残されており、現在も当地に「潤」姓の旧家を確認することができる（註2）が、出現の前後関係については明らかではない。

「潤」の地名の文献上の初出は、戦国時代末期である。原田了知行充行状（児玉韞採集文書）には、天正6（1578）年に「波多江丹後守の「池田下河原合戦」をはじめとする軍功を賞して志摩郡潤村のうち七町を加増されたことが記されている（註3）。

また、小早川領時代の『差出前之帳』には波多江村の枝村として潤村の石高が記されているが、慶長3～6年頃に波多江村から独立し、その後福岡藩領に引き継がれたらしい。

近世の記録としては、『筑前国續風土記拾遺』（以下『拾遺』）と『筑前国續風土記附録』（以下『附録』）に記載がある。潤村は、もとは唐津街道沿いの旧土師村（現在の土師町を中心とする界隈か？）の北一町（現在の古屋敷付近か？）に所在したが、元和元（1615）年に土師村の西側に移転するとともに、波多江村に属していた堀内集落を編入したとされる。

「堀内」の地名は現在残っていないが、『糸島郡誌』の波多江村雑録に「中小路堀の内」の地名が認められ、土師町と道を挟んで対峙する位置関係にあったとされることから、土師町の北に隣接する現在の「中町」付近が「中小路」に該当するとみられ、その一角が「堀内」であったものとみられる。

なお、「土師」の地名の由来については、中山平次郎が大正期に「土師」付近を踏査し散乱する弥生土器や土師器を報告した折りに、地名の由来にも触れ、素焼き土器の大量散布がその契機となった可能性を示しているが（註4）、筆者も土師氏との関連は低いと考える。

また、『附録』には、西、下小路、大道などの地名も記されるが、現在はこれらの地名は残っていない（第1図）。

なお、『續風土記』や『改正原田記』では、土師村付近は豊後大友氏傘下の臼杵氏と周防大内氏方についた原田氏の合戦の場で、敗れた臼杵氏の終焉の地が村内に所在した「平等寺」であったとされる。この寺は、豊後大友氏と配下の臼杵氏が崇敬した臨済宗の寺で、方一町の境内に七堂伽藍が配された大寺院であった由が記されているが、戦いで消失し、跡地に潤村南の真清水（益水）の福西寺が移転し、現在の真清水観音堂となったと



第1図 澁田地区周辺における埋蔵文化財の確認状況と小字 (1/4,000)

いう。

糸島戦国史の1ページを飾る地であるが、寺についての記録は、他では見ることができないことから、この検証は、今後の発掘調査等に委ねられることになるだろう。

3. 調査研究の足跡

(1) 大正～戦後期の調査

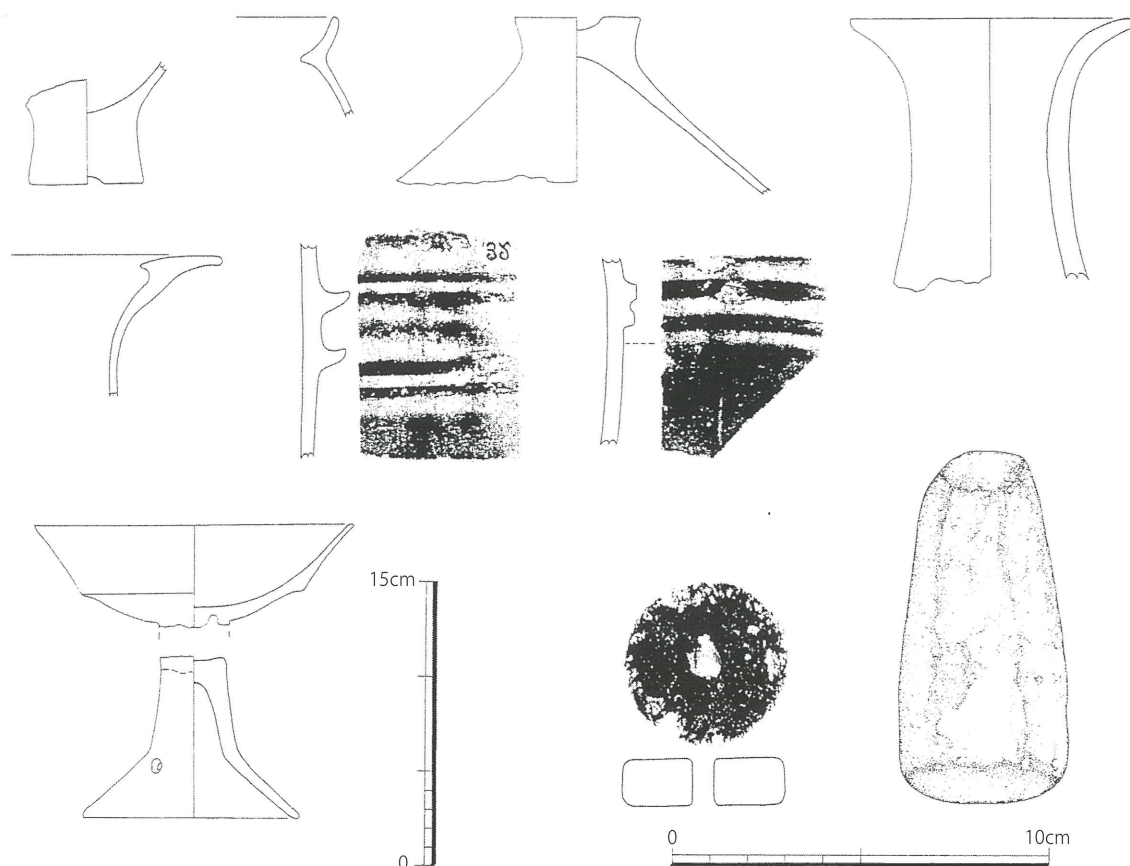
この地の考古資料に初めて注目したのは、中山平次郎であった。中山は大正期を中心に弥生土器の研究資料を収集するため、糸島地方を頻繁に訪れ、三雲、御床松原など当該地方の重要遺跡を踏査し、採集遺物を報告している（註5）。一連の調査の中で、とりわけ「土師」の地名に惹かれた中山は潤地区にも足を運び、弥生土器や古式土師器、滑石製紡錘車や、小型磨製石斧、玄武岩製大型磨製石斧などを報告している（第2図）。弥生前期～古墳時代にいたる資料であることから、近年の調

査で出土した遺物の時期とも符合する。

また、近隣の聞き取り調査の成果も合わせて報告しており、「古屋敷」は戦国大名大友方ゆかりの武士の居宅跡、さらに、潤神社古墳については力士の墓であったとする古老の口伝を紹介し、古墳については古代土師氏と重ねて「野見宿祢」のイメージを仮託させたとする所見も披露している。

志登支石墓群の調査 中山の踏査活動が続いて、この地域で調査を展開したのが旧制糸島中学校（現糸島高校）歴史部で、同校郷土博物館には付近で採集された遺物も収蔵されている。

ここで、戦前の歴史部の黎明期の活動を牽引し、戦後にかけて糸島地方の研究をリードしたのが同校出身の考古学者、原田大六である。原田は昭和24年に、三雲石ヶ崎で支石墓を調査したのに続き、地元の中村惣次郎の示唆を受け志登支石墓群を発見した。



第2図 中山平次郎が紹介した「波多江村大字潤字土師」採集土器（1/4）・土製品・石器（1/2）（参考文献⑤掲載図から抜粋して作成）

遺跡の所在地は志登ではあるが、志登の集落とは雷山川を隔てた対岸にあり、地理的には後述する潤地頭給遺跡の北に隣接する。

この発掘調査は、昭和28年12月に斉藤忠を主任とする文化財保護委員会によって行われ（第3図）、10基の支石墓群、弥生早期～中期にかけての8基の甕棺墓群、平安～鎌倉期の溝などが発掘された（第4図）。主体部が発掘された4基の支石墓のうち7号支石墓からは4本の柳葉形磨製石鏃（第5図）、9号支石墓からは5本の打製石鏃が出土している。周辺で出土した甕棺（第6図）の時期などから支石墓が弥生時代中期以前の墓であることを確認するなどの成果をあげ（註6）、翌29年3月には、支石墓としてわが国初となる史跡の指定を受けた。

なお、このとき、雷山川東岸の志登神社南の「長川」の水田中で発見された花崗岩の大石も附として史跡の指定を受けた（第7図）が、その後、周辺の追加調査は行われていない。

ちなみに、志登神社参道脇に据えられた「岩鏡」と呼ばれる花崗岩の大石は、神社東側の水田から



第3図 志登支石墓群の調査風景を南から臨む
（松岡史氏寄贈 伊都国歴史博物館蔵）

移設されており（註6）、これも支石墓の上石であった可能性がある。

志登松本遺跡 志登集落と雷山川に挟まれた水田地帯には「松本」の小字が残る。この一角で戦前に板状剥離の粗面玄武岩を素材とする大型石包丁（9枚）と粘板岩製の挟入柱状片刃石斧（3本）の未成品がまとまって出土した（第8図）。原田はこの資料を用いて挟入片柱状刃石斧や大型石包丁の使用方法について考察しているが（註8）、遺跡についての情報は出土を報じた糸島新聞の記事以外にないため（註9）、将来、発掘調査等による遺跡の解明が期待される。

(2) 1980年代の調査

志登支石墓群の調査以後、しばらく周辺での調査の足跡は途絶えたが、1980年代を迎えると一帯で行われた県営圃場整備事業に伴い4カ所で発掘調査が行なわれた。調査年次によって遺跡の呼称が異なるため、今後の混乱を避けるため小字を基本として以下のように改める。



第4図 志登支石墓群の遺構配置（『志登支石墓群』1956 を一部改変）

以上の掘立柱建物が確認されており、各柱穴の四方は一辺1m近くを測る大型のもので、建物は互いに3mほどの間隔をおいて南北方向に並び、主軸方位も揃っていることから、ほぼ同期に機能した建物群の可能性が高いと考えられる。

また、この微高地上に環濠を配した居館遺構が複数存在することも確認され、これに伴う掘立柱、井戸、石敷き道路なども発見された。この一連の調査によって潤地区における調査成果は大幅に蓄積され、遺構の分布傾向や埋蔵文化財の分布範囲の絞り込みが急速に進んだ。

集落内の遺跡 一方、雷山川右岸の旧来の志登集落内でも、住宅の建て替えなどにより数カ所発掘調査が行われ、弥生時代～古墳時代の竪穴居、中世環濠などが確認されている。

特徴的な遺構と遺物

弥生時代の遺構と遺物

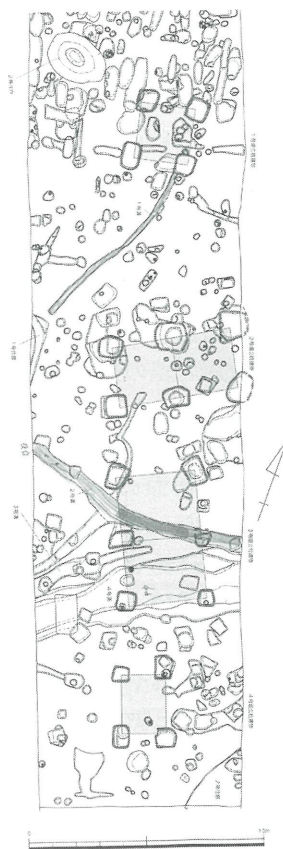
潤、志登地区周辺では、縄文時代にさかのぼる遺構や遺物はほとんど確認されておらず、弥生時代の到来とともに人々の営みが活性化する。弥生代初期の集落については、現在のところ支石墓以外の遺構は確認されていないが、前述した支石墓の上石の分布状況から雷山川旧河口に面した西両岸の微高地上に集落が展開した可能性は高い。



図12 怡土平野における弥生時代早～前期の支石墓の分布

志登支石墓群では、早期～前期の甕棺墓と支石墓、中期の甕棺墓などが確認されている。支石墓の構築時期については副葬小壺などで確実に押さえられていないものの、同地で発見された2号、3号、8号甕棺が曲り田新～板付Ⅰ式に相当することから、支石墓もこの時期に相当するものとみられ、新町支石墓群よりも若干後出する段階である可能性がある。

当該地域における前期～中期前葉の集落の推移については十分に把握できていないが、潤地頭給遺

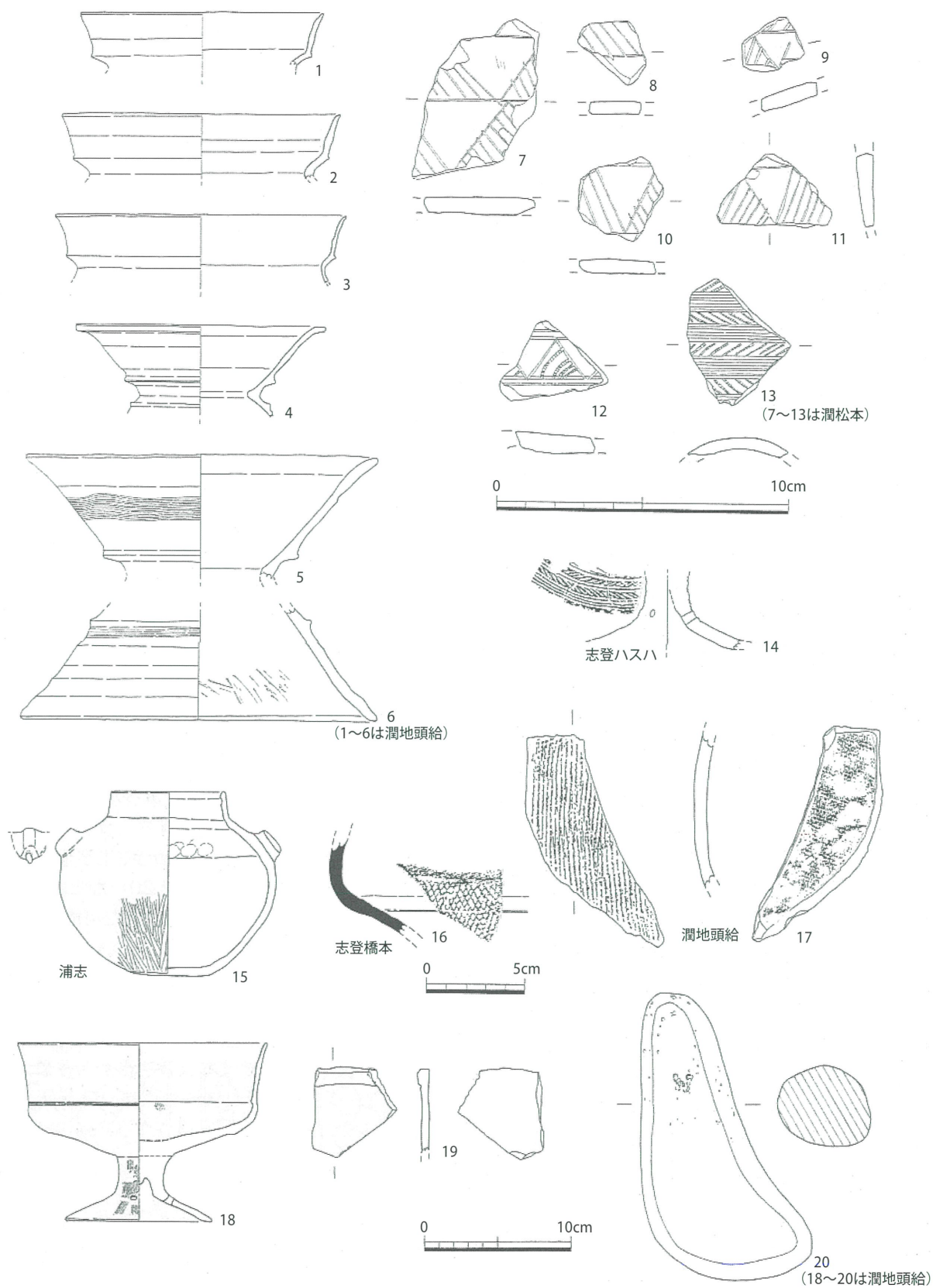


第13図 潤古屋敷遺跡の大型掘立柱建物群配置図 (1/500)

跡Ⅰ区では総数300基におよぶ弥生中期～後期前葉にかけての甕棺墓群が確認されている。この甕棺墓群と関係が深いのが、墓域との境界溝を隔てて東側(Ⅱ区)で検出された掘立柱建物を含む多くの柱穴群で、これらが当該期の集落であったと推定される。現地では当該期の竪穴住居跡は確認されていないことから掘立柱建物を主体とする低湿地性集落が展開したものと推定される。南の窪地(Ⅳ区)で出土した大量の土器廃棄もこの集落のナセル技だったのだろう。

なお、この甕棺墓群において副葬品が確認されたのは、銅釧と碧玉管玉が出土した195号甕棺墓のみで、この集落の当該地域における地位を推し量ることができる。

弥生後期の遺構としては潤古屋敷遺跡の方形掘方を有する大型掘立柱建物群が注意される。この建物群の機能については、潤地頭給遺跡よりも一段高く、内海(古加布里湾)に面した微高地上に立地すること等を勘案すると、当該地域における上位階層の居住遺構、交易等に係る公的施設など



第14図 潤・志登地区出土の他地域搬入土器、大陸系土器、赤色顔料付着遺物（1/4、1/3、1/2）

特別な役割を担ったことを予感させる。古文書の解析や、今後の周辺地区における埋蔵文化財調査にも期待がかかる。

また、1019（寛仁3年）年に大陸から襲来した女真族は怡土郡を襲来した（刀伊の入寇）が、この時に拉致された住民の中に志摩郡板持庄の住人であった内蔵石女が含まれる。板持庄は、現在の板持行政区を含めた一帯であったと考えられ、その周辺も刀伊族の侵攻の被害を蒙ったと考えられる。この戦禍を伝える遺構や遺物の発見も興味惹かれるテーマである。

(5) 中世環濠居館の盛衰

潤地頭給遺跡では、Ⅰ、Ⅲ調査区西端で鎌倉～室町期の東西に伸びる大溝群が確認され、その後引き続き行われた潤古屋敷遺跡の調査では、同時期の南北長90mの大溝が検出された。その両端は西側に屈曲しさらに伸びていることも確認されており（第17図）、中世の環濠居館の東辺にあたると推定される。

環濠の東西幅については、以前の試掘等によって西側に谷状の窪地が存在することを確認していることから、南北長とほぼ同じく90mほどの規模を想定することができる。以上の調査結果と、現在に残る地割りから、およそ方一町規模の環濠居館が存在した可能性が高い。環濠内では井戸、掘立柱建物などが確認されているが、大半は調査区外であり、将来の環濠内部での発掘調査による解明に期待したい。

一方、古屋敷～番田地区にかけて検出されている鎌倉～戦国期の4条の大溝なども環濠の一部あ

るいはそれから派生する区画溝の一部である可能性が高く、周辺一帯に広く大小の環濠居館が存在すると考えられる。

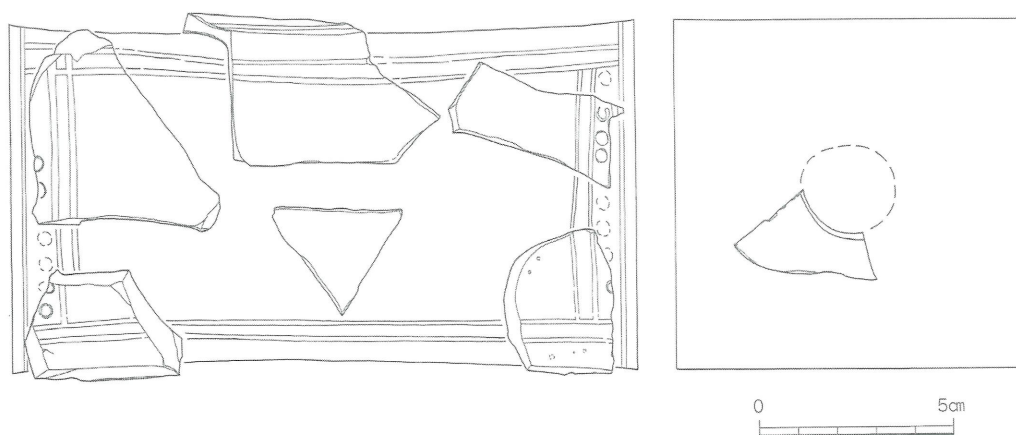
これら環濠の掘削時期について、潤古屋敷遺跡の報告書では13～14世紀に機能し、15世紀には埋没したと結論づけているが、11～12世紀の陶磁器も多く出土していることや、環濠の断面の状態から掘り替えが行われたと考えられることから、居館の出現時期、その変遷等についてはより慎重な検討が必要だろう。

前述の刀伊の入寇時に際し、活躍した怡土郡住人多治久明らの拠点もこの界限であった可能性もあり、環濠居館の出現、有力氏族、集落の台頭についても注視しておきたいところである。

なお、潤、志登地区では、古代～中世期の大陸系輸入陶磁器が多く出土しており、近年では潤番田遺跡から象嵌青磁方枕（第18図）をはじめとする高麗青磁がまとまって出土していることが報告されている。また、この微高地北端の潤丸田遺跡では、海中に向かって北に伸びる15～16世紀の敷石舗装の道路遺構が検出され、その先端には港湾施設の存在が想定されている。

これらの遺構、遺物相互の関連性については十分な資料の蓄積を待たなければならないが、当該地の支配層にあたる居館群の主は朝鮮半島との交易に深く関与していたことをうかがわせ、その出現、居館、集落の細かな変遷過程を追うことも重要な課題となるだろう。

戦国末期以後、大陸・朝鮮半島との交通の要衝としての役割りは終焉を迎え、江戸時代には潤地区南部を横断する唐津街道（第1図）が整備され



第18図 潤番田遺跡出土の象嵌青磁性方枕復原図（1/2）

たことにより、中世潤村の本村し北の古屋敷地区から南の土師地区へと移ったことが『筑前国續風土記』に記されている。これら中近世の集落変遷は、現在に残る地名にその名残りとどめているが、今後、考古学的調査成果による検証も有効な手段となるかもしれない。

4. おわりに

潤から志登地区にかけての一带は、いにしえには雷山川の河口に位置し、その東西に標高7mに満たない低地帯が広がる。ここはまた、古代から中世にかけて東西両方向から深く入りこんだ波静かな内海に面しており、この地理的特性を活かし、海を介した国内外の広範な地域との交流の舞台として長く歴史を刻んできたことが、近年の調査において明らかになり、当該地域における歴史的重要性についてその評価はさらに高まった。

今後も当該地域における調査が続けられ、より詳細な地域実態の解明が進められるだろうが、その折りに、この拙文が当該地域における調査研究の手引きとして参考になれば幸いである。

- ⑥1954 『志登支石墓群』文化財保護委員会
- ⑦1963 原田大六「扶入片刃石斧の再検討(1),(2)」『古代学研究34,35』古代学研究会
- ⑧1982 『文化財調査概要』前原町教育委員会
- ⑨1984 『志登遺跡群B地点』(志登柳遺跡)前原町教育委員会
- ⑩1985 『志登遺跡群第4次調査』(志登ハスハ遺跡)前原町教育委員会
- ⑪1985 『志登遺跡群第5次調査』(志登橋本遺跡)前原町教育委員会
- ⑫1992 『潤・壺丁田遺跡』前原市教育委員会
- ⑬1997 岡部裕俊「推定される伊都国の構造」『古代史99の疑問』中央公論新社
- ⑭2006 『伊都国の玉作り工房-潤地頭給遺跡-』前原市教育委員会
- ⑮2007 『潤地頭給遺跡Ⅰ』前原市教育委員会
- ⑯2008 『潤地頭給遺跡Ⅱ』前原市教育委員会
- ⑰2011 『潤遺跡群Ⅰ』(潤丸田遺跡)糸島市教育委員会
- ⑱2012 『潤遺跡群Ⅱ』(潤番田・古屋敷遺跡)糸島市教育委員会
- ⑲2013 『潤遺跡群Ⅲ』(潤番田遺跡)糸島市教育委員会

註

- 1. 参考文献⑬
- 2. 現在も潤地区には「潤」姓の住家が数戸残る。
- 3. 天正6年7月5日原田了栄感状
- 4. 5 参考文献⑤
- 6. 7 参考文献⑥
- 8. 参考文献⑦
- 9. 糸島新聞 昭和26年3月11日号記事
- 10. 参考文献③
- 11. 参考文献⑬
- 12. 2016 市毛鼎『朱丹の世界』ニューサイエンス社

【参考文献】

- ①1709 『筑前国續風土記』貝原益軒
- ②1813～1830 『筑前国續風土記附録』加藤一純 鷹取周成
- ③1837頃 青柳種信『筑前国續風土記拾遺』
- ④1929 『糸島郡誌』糸島郡教育会
- ⑤1910 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て」『考古学雑誌』第七卷第9号、10号 第8巻第1号